

学外公演 10 回の対論とパワー

宮 村 一 幸

—プロローグ—

舞台芸術学科の創立 20 周年にあたって、大阪芸術大学主催の学外公演がスタートした。新任の堺正俊(フランキー堺) 学科長の発案・尽力で、プロの使う劇場である大阪梅田のシアター・ドラマシティが借りられることになり、1994 年 7 月 24 日(日)、演技演出(演技)・ミュージカル・舞踊・舞台美術(美術)・舞台照明(照明)・舞台音響効果(音効)の全 6 コース 3 回生を主体とした授業として、全員参加を基本とする公演が華々しく打上げられた。芸術監督、堺。構成、堺・秋浜悟史。演出、宮村一幸。台本はシェイクスピアの『夏の夜の夢』。“10 年は続けようよ”そして“まずはオーソドックスに”と指示された。——100 余人の青春が歌って踊って芝居するスペクタクル大ロマンその祭りを 100 余人のステージハンズががっちり支える——というキャッチフレーズを掲げて漕ぎ出した。幕開きは緞帳前でタクトを振る妖精パック、曲はメンデルスゾーン『夏の夜の夢』。この船に乗っているのは、青春まっただ中の学生たちと、朱夏・白秋・玄冬に至る、年季の入った筋金入りの個性豊かな先生方である、思えば向う見ずな船出だった。

何もかもまっさら新品の初舞台。凶面通りに出来上り劇場に運び込まれた装置が、^{カミテ}上手・^{シモテ}下手の客席から見切れる。舞台の寸法はわかっていたはず。現場で大喧嘩していても始まらない。結局、装置を巾 3 尺ほど切り捨て狭くした。その上、舞台奥 9 尺高の段上に妖精王が立つと、センターのピンが人物の上半身を照らさない。お化けの役でよかったものの、長くは見せられない。稽古を重ねてきた学生は戸惑う事になるが、

その場面を短かくする。照明の効果を演出がはっきり認識するのは劇場に行ってからである、現場まで待たねばならない。照明プランを明確に読めない演出は、20 号ホールでの通し稽古で具体的に見せてもらう。しかし、それはあくまでそれらしくであって、劇場との機材の差、電気容量の差もある。

一つの作品の演出として、是非とも欲しいモノがあり、是非とも工夫して表現して欲しいコトがある。逆に不必要なこともある。演出は人に仕事をしてもらうのが仕事。しかし、出来る・出来ない・必要・不必要の問答も、コースのカリキュラムと言われればそれまで、ダンマリで引きさがる。これが、教育現場を劇場に移してゆく演出の立場となる。

劇場でじっくり考え込んでいる時間はない、ありとあらゆる事に即決・即断が迫られる。熟慮を重ねてきた構想も、あっという間に変更。幾つかの対策を準備していたはずも、事態は思わぬ方向に転ぶ。集中する即決事項の山にパニックになりそう、我ながら不得手だと思ふ。

学校での授業なら、少なくとも言いつ放しでなくリカバリーできる。学生に駄目を出した後、理解できているかどうか翌日なり次の機会に確かめて、わからなければ例をあげて再度説明する。自分の言った事の反応をみる、それが学生を預っている責任だ。

第 1 回定期公演が終って、次は辞退しますと言った私に“あれはプロセスだから”と愛のムチをくれたのはフランキーさんだった。以来、10 年 10 回の公演のうち 9 本までも演出に関り、勉強させてもらった。有り難いことである。この 10 年を区切りとして、やってきた事やらなかった事やれなかった事の一部を、学

生のレポートへの答えとして記します。

注) 「 」カッコ内は学生のレポート中の言葉

〔 〕カッコ内は第何回定期公演の略。

—レポート愛情物語—

関西外国語大学の学生が毎年公演の後にレポートを送ってきてくれる。〔10回〕1回生から4回生まで41名。厳しい批評も勿論あるが、おおむね心優しく親切な眼で見てもらっている。

「自分と年齢の変らない人たちがこんなにも輝き、のびのびと演技している事に感動した。羨ましい」

「どの場面にもユーモアが含まれていて退屈しなかった」

「脇役でも一人一人が生き活きと、一生懸命に取り組んでいることが伝わってきた。疲れを感じさせない活気とパワー。人に説得されるよりはるかにプラスになった」

「シェイクスピアの作品は小難しく、何が言いたいのかつまらなかったが、予想に反して楽しい劇だった」

「原作では何行か前を読み直す必要があったややこしい若者の関係、舞台では動作や声の出し方で感情を表現し、理解できた」

「説明過多で混乱する長い台詞より、ひとつの動作で



〔9回〕バック・若者

わかる事もあると知った」

文芸作品として文字で追っていたものが、生の立体として目で見、耳で聞く。古典劇であれ不条理劇であれ、舞台に具現化して「観た人が日常に戻った時の活力になる」それこそが舞台の仕事。「演じる人と見る人が同じ空間を共有し、感動するという場に立ち会えて良かった」とは冥利につきる。

他校生と比べると、次に舞台に登るのを待ちかまえている後輩たちのレポートは、かなり辛口、厳しい見方が多い。

「段取りくさかった。人々の感情まで振りつけて動いているようで不自然」

「バラバラ感がある。総合芸術なのだから統一感が大事。全体が歩み寄って良いものを」

「フィナーレにはしゃぎすぎて観客が冷めてしまうのでは」

他校生は「フィナーレの達成感、彼らの思いは客にも届いた。全員の表情が、心から楽しんで演じて誇らしく充実している。仲間と共に舞台を成功させる、そこに一番感銘を受けた」

「熱いものが伝わってきた。これまでどれだけ訓練してきたのだろうかと思わせる」と、結果からプロセスを察してくれる。

フィナーレに関しては近頃演出はノータッチ。そのためかいつも胸が熱くなる。自分のタッチした所は胸が痛くなるのに。結局、最初から最後まで正面きって見たことのない、たった一つの場面となっている。

—時差熱差—

「よくあれだけの事をやらせてもらえる、同じ大学生として羨ましい」と他校生に注目されている学外公演。全面的に学校側の資金投入を受け、2日間の上演のために4日間劇場を借りる、豪勢な話だ。プロの使う劇場だから空いている時のみ貸してもらえる。劇場のスケジュールを学校のスケジュールに合わせてもら

う訳にはゆかないので、公演日との調整にははらはらす。2000年は1月と7月、1年に2度の公演になり大童だったが、今まで多かったのは7月。4月に3回生になって実質3ヶ月しかない。前年から準備されていた旧台本または原作を使つてのオーディション・配役は春休み、早速休み返上の稽古に入る。

6コース合同で一つの舞台をつくり上げるのだが、横一列に並んで進む訳ではない。コース毎に進行の時差がある。まず演出の構想が伝えられ、すぐに美術がスタート。美術プランが出され検討しながら台本が練り直される事もある。音効生・照明生も美術プランを見、イメージを聞いて考える。踊りの振付けは音楽がきまらないと始まらないという具合。

コース間には時差もあれば熱差もある。〔10回〕新床を告げる鐘の音を、古来から伝わる魔除けの鳴弦ベローンとした。巫女が鳴らす梓弓の疑音。登場人物の台詞で何度か“ベベローン”と言う。ラストで森の王が王妃の身体を弓に見立て、いよいよ矢を放つシーン、ここで音効コースがベベローンの効果音を出す。音効生たちは、これというイメージが決まらず手こずっていた。通し稽古の時、音効生が自分の声でベベローンと言った。驚いた、今のは何だった、登場人物の台詞ではない。とにかく間に合わせに口で言う。これは稽古場の熱を一気に冷ましてしまうものだった。さて、劇場での本番では苦心の音響が舞台の大空を晴々と響き渡り、しっかりと魔除けの役目が果された。先生に聞かれた“本番はどうでしたか”“結構でした”結果が良ければ全て良しか。一つの専門の仕事の姿勢が、他の専門の熱を冷ましてしまう事がある。プロの世界と違い学び半ばのプロセスでは、お互いにその影響は大きい。コース間の時差熱差は大きい。

—体技と台詞—

「体技より台詞をじっくり聞かせてほしい」と2回生。「言葉以上に身体での表現力がすごい」と他校生。

稽古に入って、近頃は台詞をゆっくり喋ることから始めている。おいしい米が一粒づつ輝いているように、言葉を一粒づつ味わう遅読みの方法に時間をかける。だが、読み込んで理解した台詞も、感情・呼吸・肉声を使いだすと学生の日常に戻り、日常の喋りに近づく。他人の台詞を自分の身体を使って喋るにはまだまだ遅読みの時間が必要になる。いつれテンポが出てきて速読みになり、芝居の流れの中に合流してゆくのを待つとして、じっくり聞かせる台詞になるには時間が必要。

「台詞は観客にわかるように工夫すべき」とはもつともだ。「魔法にかかった男が女を口説く時の台詞が聞きとりにくい、なぜ変な声で喋るのか」

〔10回〕4人の若者たちの恋の奪い合いは、熱に浮かされた他愛ない言葉が多い。聞こえなければならぬ大事な言葉・台詞は普通の声で、ニュアンスがわかればいい台詞は声を変えてと、魔法にかかった男の声を裏返したり戻したりした。裏声で喋るのは体力が普通以上にいる、その上、追いかけてあいの動きはすさまじく、若さのパワー全開である。

「演技がすごく大胆で荒っぽかった。プロではなく学生だから出来る演技だと思う。上手下手に関係なく、それが面白くて」と他校の学生。体中アザだらけになって励んだ者に嬉しい言葉だ。

「稽古が残り少なくなるにつれて、もっと時間が欲しい」後半のあせりが前半には予想できない。石彫を刻む時、一日の仕事はノミを研ぐことから始まる。素材は固く、一日の仕事量は微々たるもの。腕はしびれ、作品以前にノミを作る仕事で日が暮れる。芝居の場合、素材は人間で刻み手と同一人物であり、声・呼吸・目・手・足、身体の全てが道具となる。伝達に欠かせない道具＝自分つくりにより一日が暮れるのを厭わないと思えるか、思える楽しさを持ち続けられるか。稽古が残り少なくなった頃、それでも大学の構内のあちこちで声を出し身体を動かし、自前の“ノミ”をつくり続けている学生を見かけると嬉しくなる。

「演出の言いなりになるだけでは嫌。個性を出したい」
——言いなりになった事があるのだろうか。まず立派なノミをつくれ、それが素材・個性だ。そして演出の求めていることをやって欲しい。

「4人の若者たちがいつも同じようだが、伝統ですか」
一つの作品の中には変えたい所もあれば、変えられない所がある。4人の若者も年毎に少しづつは変るが、基本的なものは一貫している。若者役は、演者である学生に一番近い年令であり役柄だ。近い役ほど演じにくいものだが、人気がありオーディションには希望が殺到する。いつもの事だが案の定、学生は若者役と自分を重ねてしまい、自分の個性を100%発揮しようとする。他の人と違う事をするのが個性だと、戯曲の中の役を置きざりにする。それを抑制するために基本的な型が出来た。それが伝統になった。

「笑いを誘う場面がいくつもある、ウケを狙いすぎて
いるのでは」

「身内だから笑えるが、一般のお客様は冷めてしまう
のでは」

観客は見巧者が多い。客としての楽しみ方を身につけている。台詞の未熟さを若い体技でリカバリーしている演出の企みなど先刻承知での見物だ。“学生にしては良くやってる／元気をもらった／よくあれだけ動けるものだ、見事な若さだねえ”だが、見巧者は役者の稽古量の違いを見抜く目も持っている“もっとしっかり教えてあげて”と叱られる。時間割りだけの稽古で足りるはずもなく、時間外の稽古となるとアルバイトをしている学生は休まねばならず食費にひびく。愚痴はさておき、せつかく学生がつくる舞台、若さの未熟を逆手に取って、今だから出来る今しか出せない魅力を惜しげなく披露しようではないか。産卵期の鮭の大群が大元気で流れを溯るごとく。幸い芝居の中身は祝婚劇、何の遠慮がいるものか。

—会議は踊る—

[5回] 先生の側から『夏の夜の夢』を変更しようとの声が上った。この年、舞踊コースがバレエ『青雲』を、演技・ミュージカルは合同でシェイクスピア作『十二夜』を上演という2本立てとなった。スタッフは両方に対応する。『十二夜』の13の役をダブルキャストにして、19人が残った。原作のフェスタという道化役をこの19人にあてる。演技生とミュージカル生の混成パーティである。道化(CLOWN)の登場シーンはかなり多い、常に集団で動く。コースが別で時間割も別、日頃の交流もあまりない19人、全員が顔を揃えるだけでもままならない。何より、自分たちが役を外れたその他多勢だという気持ちに支配され、段取りだけで気のない群になっていた。

稽古も後半に入り、他のパートの熱がどんどん上ってきた頃、道化役の学生が一人事故に会い怪我をした。心配する道化たちに仲間意識が生まれ、話した事もない人と話し、言い出せなかった不満をぶつけ合った。彼らはこの話し合いを道化会議と名付けた。話し合う時間と場所がたっぷりあるのは、教育現場の学校ならではのメリット。「もっと早く気が付けばよかった。遅かったが話し合っただけで気持ちがまとまった」と事の顛末を書いている。

チームとしてまとまった時、一人一人のパワーが倍増されて面白い群像となった。群は個で成り立つ、人は石垣・人は城。一つの触発を受けて、あとは自発性に任された場合、先生の存在がない所で一人一人が世界を発見する。困り果てて苦しんで、自分たちの智恵を絞りきる経験をするなかでパワーを出す。学びとってゆくパワーを逆に教えてもらった。その後、この先輩たちから受けついで、パック会議・職人会議・職人の女房会議・八百万の神会議等、複数の役について学生たちはグループ毎に会議をもち、結束するようになった。

[1回] 思えば、多人数集団は布袋を衣裳とした蓑

虫だった。蓑虫会議はなかった。配役に不満の学生たちは集団を組むのを嫌がり、稽古に集中することもなく、舞台稽古(ゲネ)・公演共に小さなミスが多く目立つ結果となった。ゲネの時、舞台上で静止しているはずの蓑虫たちが、小さく無神経に動くのを見て学科長は“ほれ、また動いた・まただ・また・ほれまた…”演出は客席の隅で小さくなっていた。

〔10回〕女房ノートという日誌をつくって読み合った職人の女房たち。職人グループとは別の葦簀ヨシズに巻かれて登場する。背丈より高い大きな一枚の葦簀が6人1組の持ち道具となる。「人の手で支えているため、一人が手を放すと他の誰かが支えに行くという、台詞には関係ないが自然な動きとして成り立っているのが面白い」自然に見えるのは苦勞して稽古を重ねた努力の賜物。予想できない葦簀の動きを予想して新しい動きを考え出す。横から覗いているばかりでなく上からはどうだろう、肩車して一人を持上げるシーンも女房たちで編み出した。計算・計算は続き、秘すれば花の妙味で学生たちは楽しんだ。ぎりぎりの不安定なところで安定してゆくのが稽古の偉大なところ、やってこそ味わえる妙味。「沢山の人で芝居をつくって行く、学外公演はいろいろな意味でビックイベント」「演出の意図を汲み取ることを学んだ」自覚と思考の進歩。「見ている人は見ている」観客の素直な反応は彼女らの自信につながる。葦簀の連携プレイに端を発し、これがウチの亭主かと馬鹿にしていた職人とも「愛情がほのぼのと」奏でられた愛情物語にまで発展した。

〔10回〕12人の八百万の神々(ヨロズ)は3場からほとんど出ずっぱり、その上、舞台奥で後ろを向き、亀の甲であり松の樹皮である背中を見せてモノと化している事が多い。「他の役者の演技は見られないが台詞を集中して聞ける」ことを実感しながらも「他の役者は台詞を喋っている、悔しい、むなしい」とも思う辛抱役。

「一番の見所は、神々や目に見えないものと近つ飛鳥の人々との交わり。4人の若者の展開を後ろで動かずじっと見守ったり、決闘させまいとして動き回る姿に魅せられた」「演技の一つ一つが丁寧で、長い時間集

中しっぱなしでいられるのはすごい」他校生からのメッセージ。

決闘を邪魔する場面では、亀石を移動させたり組み合せたり。始めのゲネでは混乱して見えたが、ゲネ・本番を繰返すうちに整理され、変化し進化していった。ダブルキャストにつき合っただけで難かしい事もあるが、倍の稽古量の成果も現われている。一日一回のゲネと本番で終るダブルキャストのA・B班、その両方を相手に二日間のゲネ・本番で、二度おいしい口をするヨロズ。

〔10回〕学生も増え、幾つもの環ができた。森の妖精コバケ16人、ヨロズ12人、職人たち、職人の女房たち、貴族たちもまとまって、グループ毎にオリジナルTシャツをつくるという現象が起った。貰った先生方は何時着ようかと嬉しい悲鳴。白秋・玄冬には少々つらい色もあったので。

毎日が新3回生の出演だから、彼ら本人に歳月に積み重ねはない。しかし3回生が変化しているのはわかる。

—おーい裏方さん—

「美術が演出の邪魔をしていると人から言われた、どこがどう邪魔をしていたのか」演出にかかわって美術



〔10〕職人の女房たち

に邪魔をされたというような事はない。それどころか、コースの学生が20人とすると、20の舞台装置のデザインとミニチュアが早々と見せてもらえる。上演台本も未完、配役も先の時点でこれは本当に有難い。あとは駄目出しの応酬で泣かれたり睨みつけられたりの日々だが、このプロセスの中から幾つかの芽が出て育ってゆく。

〔1・2回〕舞台全体に建込まれた大きな装置がバレエとダンスの先生から、踊りの邪魔と嫌がられたのは事実だ。舞台上には音効も照明も入っている。以後は大きな定着した装置は使わず、舞台上で移動できる程のものとなる。〔3回〕オーペロンの遊び道具とした太鼓橋もキャスター付き、本人とバックたちによって自在に出し入れされる。スライドするパネル類は美術生の人力によって動かされる。〔5回〕『十二夜』では、道化たちが“転換、転換”と言いながら舞台上を動きまわるうちに、屋台が回転して場面が変わる。美術生が人力でわざと何度も廻して場転を一つの見せ場とする。屋台の中にスタンバイしていた役者の目も廻った。

美術・音効・照明にも観客にわかりやすい見せ場をつくる。専門分野化の進行と機械だらけの現代において、そこに人間が介在していることがともすれば見落される。せっかく縁あって舞台芸術学科の学生として巡り合ったのだ、同じ舞台上に立って力を出し合うのはどうだろうとコースの先生と相談した。〔7回〕若者



〔5〕道化

たちが決闘する場面を大嵐にした。舞台中央に昔ながらの擬音をつくる道具類を持ち出し、雷・風・雨の音を音効生が表現する。稲妻は照明生、打ち合う剣からは火花も散らせる。エネルギー全開の見せ場。

〔10回〕大きさの違う月が複数出てきた。「時間の経過を表わしている」「月に泳ぐ魚が、追って追われる恋人同志を象徴」と理解された反面「月を隠す雲の動きがスムーズでない、つかえながら出て」と厳しい。人が裏で操作している事に否定的だ。いつの間にか出ていてもよし、ギクシャクと出て観客の目に止まるもよしの演出。

動かせる装置・松ぼっくりのオブジェは大きいので、稽古は仮のもので始めたが、亀石は早くからつくられ稽古に使うことが出来た。動かすのはヨロズ、何度も使ううちに工夫され計算が可能になってくる。美術の方も、それなら並べて顔になるようにとイメージが広がり具体化する。デザインが演出より先へ行く。ヨロズの動きが亀石に制約されることで少しは無駄な動きが減ったが、もう少しのところまで時間が足りない、時間の逃げ足は亀より早い。

稽古場の壁に貼られた衣裳プランの絵。役者たちはそれを眺めながら想像する日々。いつ着られるのだろうか、似合うだろうか、動き易いだろうか、デザインが凝っているだけに心配。とにかく一度着てみたい、演出は着せて動かしてみたい。ところが衣裳はなかなか出来上がってこないのが常、ゲネの時点でまだ縫っている事もある。

舞台美術は基本的にはデザインコースだから、トンカチ・ミシン仕事が主体ではない。まして衣裳は美術の一部で、カリキュラムの時間は少ない。衣裳プランの絵を現実に人が着られるようにするには、布を選びパターンを起し、そして縫製の技術がいる。外注したものが破れなくて、内部制作されたものがすぐに破れてしまったりするのも無理はない。劇場の地下・奈落で、時間に急かされながらせせせと修理にはげむ学生が「自分のデザインした衣裳を役者が着て、観客の前

でライトを浴びて演じてくれているのを見ると、感動する」そんな健気な声を聞く。

〔8回〕歌い踊る原人たちの衣裳は学生の手づくりだった。原人とあるからには原人らしく、素朴で骨太でエネルギーな毛深い猿人にしよう。理由は二つある。一つは今回登場する宇宙船やハイテク・ピカピカのロボットに相対するものとして。もう一つは今回の主体である舞踊生のバレエ衣裳に相対するものとして。舞踊生は大学入学時すでに、あるグレードに達している。ミュージカル生はダンスも習っているが、歌も芝居もこなさねばならない。同じような衣裳で踊りの差を見せるより、違う魅力を出してもらいたい。

網でつくられた全身を覆う服が美術から原人たちに渡され土台になる。毛糸が配られ網目に結びつける作業が本人に任された。さあ、これからが仕事。稽古の合間、あちらこちらで網と毛糸の手作業が繰り返された。〔6回〕職人と女房たちの包装紐による水草づくりの手仕事は、そのまま舞台上まで持出され芝居の一部になった。この労力、手づくり芝居のしんどさは学生にとって無駄になるまい。

原人にも器用・不器用なのがおり、びっしりと毛糸が詰まってふかふかに仕上がるもの、まばらで寒そうなもの、それはそれ、それぞれ各々の個性・個性・個性となる。そのモコモコ姿は、巷にありふれた細身のレオタード姿と一味違うものになった。しかし後に“あれは徒労だった”の声を聞かされた。そうか徒労だったのか、学生たちには気の毒なことをしたな。

そして翌年〔9回〕光り苔をイメージしたパック 19 人の出演となった。衣裳プランは有り物を利用してのリサイクルに脳みそが絞られた。前年の原人の労作がこま切れにされ、何種類かの別の布と接ぎ合せて、一人一人が違っていながら統一感を持った衣裳がつけられた。「植物のようでもあり、苔のはえた動物のようでもあり」怪しげな森の妖精の原点を表現して存在感があった。

先輩の仕事を利用して工夫してゆく継続のパワー。

徒労は徒労に終わったわけではない。

—夢の組織図—

〔5回〕タロットカードの絵の道化は、袋を括りつけた棒を担いで、犬に吠えられながら花咲く道を歩いている。この棒と袋を 19 人の道化の持道具とし、智恵棒・智恵袋と名づける、道化は智恵がないと務まらない仕事。美術の 2 回生がデザイン・製作し稽古場に持込まれた 19 の道具。道化たちは早速それを持って、最初は恐る恐る、やがて少しづついつものペースになり、動き踊り芝居は進行してゆく、と、棒は折れ袋は落ち、あれよあれよと言う間にほとんどが壊れてしまった。使った方は驚き、作った方はもっと驚きがっかりした。“振り回すんですか”と美術生。

舞台上で使うものは目的・役目がある。日常で壊れやすいものでも、演劇という非日常性の中では壊さないように、壊れないものとして使う。紙でつくられても石は重いもの、硬いものとして取り扱う。デザインし制作するのが美術生、使いこなすのが演技生。まず壊す壊されるがあっても良い。道具を介してデザイナー・制作者・使用者間のコミュニケーションが出来る。その為には公演の何日も前にその日が欲しい。この時は早く壊れてくれて良かった。その後智恵棒・智恵袋はしばらく出来て来ず、公演日が迫ってやっと上ってきた。がっちり丈夫なものになっていた、重かった。道化たちは重量に悩まされたが壊れることはなかった。

叩いても踏んでも壊れない丈夫な道具は結果として安心、すぐにバラバラになってしまうのは論外、その中間に舞台の道具がある。壊してはいけない、壊れないものとして扱う。それが扱い方の技術、神経の使い方、もう一ランク上の授業となり、そこに至って芸の妙味を味わう。観客に小さな嘘はつかない、芝居という大嘘のために。美術生との遣り取りプロセスの中で、使い勝手の妙味が生まれるまで辿り着けなかったのは残念だったが。

[1回] タイターニアの冠はゲネの直前に出来上った。早速使ってピルエット、とたんに頭から吹きとんだ。若者たちの履物も走ったら壊れた。つくり直しの作業は徹夜の仕事となる。

美術生のデザインでロバの頭を外注した。まず稽古用に仮の頭が来た。耳・鼻・尻尾が動く。被せられたボトムは自在に動かせるように練習を繰り返す。スムーズに操れるようになってくると場面が盛上る。音楽に合わせてリボンを巻いた尻尾がピシリと決まると囲りも大喜び。使い勝手はとても良く、使いまくった。通し稽古の時、全く同じ仕掛で真新しい公演用の頭が届いた。

大きい道具は外部発注だが、細々としたものまで外注していたら膨大な費用がかかる。被り物、履物、持ち道具その他の小道具類、これらの制作の所属はどこなのか。美術と言う人もあり、演出班としての舞台監督だと言う人もある。衣裳プランのデザイン画に剣が描かれていても“剣は衣裳じゃない” あちこちとトライ廻しで通し稽古に間に合わず、古いものを引っ張り出してくる。使い廻し・再利用の工夫、大いに必要なこと。ただ、安易に有り物で間に合せる、出来合を買ってくるだけのやり方は、プロセスを大事にする当学科にそぐわない。近頃嬉しいことに小道具専任の係が誕生した、それも卒業生である。待ってました、ようこそお帰り。

「なぜ、あの人に偉そうに言われるのか」と学生が訴える。[7回] 舞台監督(舞監)を学外の人に依頼した。その人に付いていた助手が生意気だと不人気。プロの人から見れば学生のやる事は歯痒いだろうが、学業途中の彼らにすれば、先生でもない人の指図に戸惑う。それまで舞監は学内の先生がやっていた。しかし、先生には他の授業があり、稽古に立会う時間が少ない。舞監は演出と共に常に全体に関わり、片手間にできる仕事ではない。

舞監の現場は厳しい。緞帳の上げ下げが遅い・早い、と大声で喚ばれる。“その連絡は聞いてない”と台本

を投げつけられる。劇場では搬入から搬出・退場まで手際の悪かった事は全部押しつけられる。カリキュラムに舞監を勉強するコマはあるが、学生ではとても無理。学外を経験して舞監の出来るパワーとコミュニケーション性を持った人物が出てきて欲しい。

[4回] 演出助手がついた。理由は、それまでの研究室スタッフでは研究室の仕事が多くて、稽古に貼り着いてもらえない。

[8回] 3回生終了時にすでに一般教養の卒業必要単位を取得しているのを条件に、4回生が4人演出助手としてぴったりと着いてくれた。卒業制作の単位をこれで取る。熱心な仕事ぶり、学外公演の経験が彼らを育てていた。一年しか変わらない先輩からのアドバイスには、反発する学生もなかにはある。しかし、自分たちがやってきて、嬉しかった悔しかったがあつてこそその学外公演に対する愛情、後輩に対する愛情。“今年は下手やなあ”と言うと“私たちもこんな風でした”と笑う。役づくり以前の、学生として実習に向う考え方、姿勢にも駄目を出したいと言う。一年違いの学生たちが、先生の居ない所でどんな話し合いをしているのか。一年しか変わらないが、学外を経験する前と後では学生に大きな変化がある。すぐに卒業する彼らの中から親身になってめんどろを見てくれるような人が出てきて欲しい。

学校というシステムと公演する団体としての組織にはズレがある。現場での混乱、組織の不明さと機能の悪さを心配した一人の先生によって、役割分担の組織図がつけられたことがある、機能しなかったが。学校のシステムを熟知しながら、各先生の出校日を細かに把握し、微調整できるプロデューサー役の出現が望まれる。年々ふくらむ学生たちの期待に押しつぶされない、この世にお客に来たような、元気で陽気で遊び心のある、そして教え上手な、プロセスを大事にするプロ、そんな先生が組織図のあっちこちに居て欲しい。



〔1〕バック

—駄目のパレード—

「ああしろこうしろと、あちらこちらから駄目出しのパレード。先生方同志が仲良く話し合ってもらえませんか」最終段階に入って駄目出しが溢れるのだ。ある程度出来上がれば何とでも言える、出来上がったものを見て批評するのはもっと容易い。出校日の違いで各コースの先生方の出会いが少なく、専門別の不平不満・欲求不満は劇場の現場で最高潮に達する。演出の横には演出班が居、各コースの先生と学生チーフが居る、学生はすぐに知る。

先生も各々に姿勢が違う“仲が悪いわけではない、相性が悪いだけ”と言ってみても、演出としての腑甲斐無さに滅入る。コース毎に細々と即決・即答を求められても、安易に変更すると影響が次々と波及する。かと言って、良かれと出される提案に熟考している暇はなし、苛立ちが言動を荒々しくする。自己嫌悪に落ち込んでも学生には何のメリットも無く、不協和音を観客に感付かれないように協和音に変えなければ公演の意味がない。

開幕を前にして、ひたすら頼りに出来るのは、これ

だけ稽古したのだからと思える稽古量の多さだ。学生たちもこれには納得する。“ケイコ、ケイコ、ケイコに勝るものはない、肉喰え、肉！”〔8回〕のモットーだった。

〔10回〕劇場でゲネの後、^{ウマ}美^{オトコ}男子の衣裳の変更が言い出された“上半身を裸にしたい”。演出は困る。すぐ後の場面に森の王ムスヒが上半身裸になり、婚礼を祝福する弓を射る、祝婚劇の最後のヤマ場が控えている。演出は不承知。急遽話し合いが行なわれ、片肌を出すという折衷案になり、本番までの忙がしく短い時間に衣裳の手直しがされた。現場で対応するのも授業の一環だが、時間との戦い、デザインした学生に理由説明もなく変更された。

〔8回〕原人の時も、手足にスパンコールを付けたいという意見が出た。舞台をより良くするための上昇志向は大事なことではあるが、コース毎に個々の主張が出されると全体としての大きな流れに響く、流れをつくる学生に淀みが出る。自分のコースを大事にしなくて誰がコースを大事にしてくれるのかと言われればそれまで、演出が頼りないといわれればまたそれまで。劇場では先生方のプロとしての目が一段と厳しくなる。劇場には劇場づきのプロの目もある。初演の時は堺先生が、楽屋入りから退場までの挨拶を学生に教えておられた。

プロの厳しさをひしひしと感じながら学生たちは作業に追われる。先生方もいろんな対応に忙しい、お互いに時間不足。現場での時間は実に貴重だ、他コースからの要請を学生に相談している暇がない。学生は理由もわからず自分たちのデザインが変更されたのを、舞台袖で見て驚く「これまでやってきた事、教えられてきた事は何だったの」結果の良し悪しに係わらず本人には不満が残る。

良い結果が出なければ何の価値もないのがプロの仕事。プロの仕事師として現場を生き、修羅場をくぐりぬけてこられた先生方からみれば論外のことであり、一瞬が勝負なのはわかるのだが。

—再生のバリエーション—

「初めての観客に、死と再生が理解できるのか」と学生が心配する。「自分たちは授業で『夏の夜の夢』を学んでいるからわかるが」。この戯曲には“再生”のテーマが幾つもちりばめられている。若者たちの深い眠り（仮の死）と目覚め、劇中劇の嘘の死と目覚め。原作では劇中劇のピラマスとシスビーはライオンの関与によって剣で自害する。翻案の近つ飛鳥バージョンでは〔6回〕ライオンの代りに大カワウソを登場させたが、〔7・10回〕大蛇に呑み込まれた後、若く美しく再生する方法をとった。しかし、呑み込まれる＝死、また出てくる＝再生という図式がはっきりしなかったようにも思える。やはり剣で自害し、芝居でしたと起き上がる方がよくわかるのかも。

〔10回〕大蛇から再生したのが舞踊生。微笑みながら見られるバレエだったが沢山の反応があった。

「ギャップが大きすぎて理解できない」

「意外性があり面白く楽しい」

「素晴らしい踊りだが意表をつかれて笑った」

「そうきたか！こんなもありだな」

台本作成中に舞踊コースの実習を見せてもらったのがきっかけだった。数人の踊りに魅せられた。彼らの技倆を最大に生かすにはどこで使うか。飛鳥は中国・朝鮮との交流が盛んな時代、シルクロードを経て西洋



〔10〕コバケ

の異文化が流入してきても不思議ではなかろう。珍しい異国の踊り手が祝賀の宴の舞台に賛助出演したという訳。

〔4回〕“演劇を冒瀆している”外部の人から聞いた怒りの声だった。職人たちが祝賀の芝居を演じている劇中劇の真最中、祝われている側の貴族たちが全員退場してしまったのだ。下手くそで馬鹿馬鹿しい芝居を見ながら大公シーシアスは“心を見て、出来栄を問わぬことだ”と、上に立つ者の心遣いを花嫁ヒポリタに説いていたにもかかわらず。

この時の演出の意図は私には不明だが、同じ戯曲で切り口を変えようと様々な方向を探ると、時には道に迷うことはある。

神々を喜ばせ繁栄を祈る、芝居の原点を踏まえ、祝婚劇としてのテーマを締括る素人芝居。芝居好きのシェイクスピアが、愛する役者を役者にして楽しんで書いた劇中劇。「劇の中にも観客が居るし、私たち観客も居る、こういう空間で劇を見る。私たちが劇中の観客として参加していたのだ。親近感がわいた」とは、この回以外の観客の、イレコの構造を面白く思うレポート。

芝居のあまりの下手さに疲れて退場してしまったシーシアス・ヒポリタ、若い恋人たちの自殺と再生（誕生）を見ずに、真夜中を知らせる鐘の音も開かずに引っ込んで縁起が悪かろう。もう少し辛抱すればよかったと、新床に急ぎすぎたのを後悔しているかも。あとに残った劇場の観客に、シーシアスに代ってお詫びを申し上げます。

—東京でござる—

〔9回〕大阪公演は6月12・13日、初めての東京公演が9月18日、間に夏休みがあった。

〔10回〕大阪7月2・3日、東京7月19日と公演日が接近していて稽古期間は実質1週間。時間がないので各コース先生方のアンケートをもとにして、ダブルキャストをシングルに再編成。

〔9回〕配役を再オーディション。丁度大学でキャンパス見学会があったので、来校した高校生と父兄にも現場を見学してもらおう。この時、上演台本ではわかり易くしている台詞を原作の長い台詞に戻した。すでに学外の大舞台を踏んでどれだけ喋れるか。だが、同じ役なのに文章として聞こえてこない、やはりもっと時間が必要なのか。徹底的に戯曲を読む時間が欲しい、今、学外公演のために一番必要な、欲しい時間だ。新しいキャストでの稽古が始まる、酷い、一度演った事が変な自信になったのか模写を見てるようななぞりの稽古が続いた。

〔10回〕美術が変わった、短期間で手直しがされた。“不細工な”と早くから言われていた舞台奥の蛍の吊りもの。演出としても始めから駄目を伝えていたが、学生はどうしてもやりたいと自力で制作し直訴。結局大阪公演では先生方は目をつぶった。案の定、評判は良くない。ところが彼らは怯まなかった。2週間をきっちり使って作り直した。蛍を小さくし発光体のケミホタルを入れ上下に動かす、きっかけ練習も重ねた、何とかしてイメージを具体化したいという粘りのパワー。

本舞台の幕が上り、観客が反応し、初めて良し悪しを納得する。大阪公演だけなら“やはり失敗だったな、お疲れさん”で終り。東京公演のおかげでチャンスをむしり取り、中途半端で終らなかった。結果がプロセスに組み込まれ、次の結果に向けて見事に進化した。〔9回〕初めての東京公演。廻り舞台（ボン）がある、せっかくなら使いたい、但し使えるのは現場でだけ。稽古場のホールでは床にボンを描いて稽古をした。床は動かない、役者たちは床が動いているつもりで一周何十秒と測りながら、自分自身がじりじりと移動しつつ演技する。

〔10回〕今回の大きい道具が人力で動かすには手に余る。今度は演出も少しずつ移動しながら見るという方法をとった。馬鹿馬鹿しいようだが、どちらの稽古も工夫がおかしくて楽しく進められた。

〔9回〕さて、東京で初日の稽古が終った翌朝突然、

“ボンを使うのは止めよう結果が大事だ”の意見が出た。ボンを廻すと音が出る、台詞が聞きづらい、立つ位置が変わって見づらい等々。演出は驚いた。演出は楽屋に、この場の主役である職人全員を集め緊急会議。夏休みを返上して一生懸命に稽古してきたのは何だったのですかと泣き出す学生も。

まず、大事な大事な劇場での時間を一時間もらう。舞台上の作業を全て中断して、もう一度稽古。午後からのゲネでまずかったらボンを廻さない、学生と約束した。大阪公演のあと、どこか演技になぞりのあった職人たちの舞台は、これで目が覚めたかの如く変わった。

「学外公演は先生のためにあるのですか」

良いも悪いも結果は学生のもの、やってみなければ結果は出ない。やってみて結果を納得して、プロセスの意味を納得する、プロセスと結果がしのぎを削る。全ては学生のためだからこそ、彼らに恥をかかせまいとの先生方の心配り、“止めよう”はプロの目から出た熱い言葉。稽古さえしていればいいと微温湯につかっていた学生に熱い湯が注がれ目覚めさせてボンは廻った。

暑いまっ盛り、汗だくで稽古に励んだシーンを“止めよう、結果が大事だ”と言われた学生の“プロセスが宝と言われていた先生方のあのプロセスは何だったのか”——この一言が、そして、もう卒業してしまった学生諸君、今年卒業する〔10〕の学生諸君に拙ない対論のぬき刷りを渡したい気持ちがこの文章全てを書くパワーになった。ありがとう。



〔10〕「美し男子・美し乙女」